

令和元年度 第1回 多摩六都科学館組合事業評価委員会 会議録	
日 時	令和元年6月3日（月）午後2時00分から午後5時00分まで
開催場所	多摩六都科学館2階201会議室
次 第	1 開会のあいさつ 2 議題 (1) 平成30年度 自己評価の報告について (2) 平成30年度 外部評価について (3) その他
出席者	小谷泰弘委員、坂本和弘委員、柴田徳思委員長、杉浦幸子委員、桧森隆一委員 (五十音順) 事務局：手塚事務局長、豊田管理課長、内海主査、小菊主任、原主事、 プランニング・ラボ（村井代表） 指定管理者：高柳館長、廣澤統括マネージャー、高橋リーダー、伊藤統括補佐、 高尾リーダー、齋藤リーダー、原主任研究員
決定事項	● 平成30年度外部評価について
資 料	(事前配布資料) 資料1 多摩六都科学館事業評価報告書（案） 平成29年度～平成31年度（3カ年）の中期計画における 平成30年度（2018年度）実績報告ならびに事業目標の達成度 等に関する評価報告 資料2 平成30年度多摩六都科学館市民モニター評価表 資料3 平成30年度多摩六都科学館及び多摩六都科学館駐車場指定管 理者事業報告書 資料4 多摩六都科学館利用者・駐車場利用台数集計表及び利用料金集 計表（歴年度対照表） (当日配布資料) 資料5 平成31年度多摩六都科学館及び多摩六都科学館駐車場指定管 理者業務事業計画書 参考 平成31年度実施事業にかかる広報物 多摩六都科学館ガイドー学習利用の手引きー
記録方法	発言者の発言内容ごとの要点記録
特記事項	6月17日（月）までに総括的な意見等の欄を記入し、事務局にメールで送る。
<p>凡例 発言者の略記（長：事業評価委員会委員長、委：事業評価委員、組：多摩六都科学館組合、指：指定管理者、プ：プランニング・ラボ）</p> <p>1 開会のあいさつ 高柳館長、手塚事務局長より開会の挨拶。</p>	

2 議題

(1) 平成 30 年度 自己評価の報告について

組：平成 30 年度の事業評価の進め方について説明

指定管理者よりプレゼンテーション

(資料 1 事業評価報告書と資料 3 事業報告書を併せて指定管理者より説明)

(資料 3 事業報告書の抜粋、補足説明という意味でスライドを作成し、説明)

(スライド準備の間、春の企画展 文房具展の 6 9 1 0 (ロクト) キャンパスについて指定管理者より説明、アーティストと参加者が地域に関連した絵を描いた。このようなコミュニケーションの積み重ねが地域づくりの基礎となっていくと考えている。)

指：今回の企画展は文房具をテーマにしましたので、地域性を出すのが実はすごく難しいと思いました。その中で、絵を描くとか夢を描くということに着目し、これはもう武蔵野美術大学さん(小平市)と組むしかないと思ひまして、杉浦先生に相談させていただきました。この地図を描くというのは、アーティストの方のアイディアでして、ご相談したときに、六都の地図を描きたいということでした。住んでいる人は自分の住んでいる場所を描き、住んでいない人は今あるまちの中にどんなものがあるか、足りないけども、作ってみたいものはどういうものかをこの中で表現してもらおうと思ひました。子どもから大人まで好きなものが描けて、参加できて、1つの地域が六都の圏域の中にあるものも、ないものもつくられたワークショップ型で作成した地図です。今回は、企業のご協力をいただきアートブラッシュという描くときに使う道具や画用紙を提供していただきました。

指：科学館事業、特別企画展について説明

事業報告書 9 ページ 1、科学館事業(中核事業) 1-1、調査研究・収集保存活動

チバニアン[®]の露頭調査について説明

事業報告書 14 ページ 1-2、展示活動 ②企画展示

平成 30 年の春の企画展と夏の企画展、秋の企画展、冬の企画展、平成 31 年春の企画展について説明。平成 29 年の春の企画展「たまるく水辺の案内所」は、地域の川というものを中心にした展示を行ったものです。冬の企画展は企画展だけは外部に委託してロボット展を毎年実施しています。「しくみの部屋」にある「ミスタースパーク」をこのときだけ動かしますので人気のある企画展です。あとは、スタッフで企画した夏の企画展では、鉄道というものをベースに実施しました。鉄道の技術だけではなく、「駅からみえるまち・ひと・技術」ということで、鉄道の発展が地域の発展にどういった貢献をしてきたかを含めた形での展示としました。本物の鉄道の運転台や実物車両の 2 分の 1 の顔の写真スポットなど子どもから大人まで楽しめる内容です。秋の企画展は、「鏡であそぼう～ミラークルワールド～」と「日本万華鏡大賞展」を実施しました。体験性を重視し、鏡を使っていろいろなものが見られるというような子どもや大人が科学の不思議を体験できる内容です。「ぶんぶん文房具展」は、平成 31 年春の企画展で、体験性を重視すると共に文房具の歴史についても展示しました。会場では、「ぶんぶん文房具ずかん」を使って、ありとあらゆる文房具を使う体験ができる内容で、好

評でした。

指：武蔵野美術大学さんとは、このほか、石や化石のスケッチをする教室というのを実施していただきました。

事業報告書 20 ページ 1-3、天文映像活動

平成 30 年度は 6 番組を天文スタッフが作り、投影しました。観覧者数ですが、一般プラネタリウムは約 6 万 8,000 人で、日曜祝日の 1 回平均が 231 人、満席が 234 人ですから、ほぼ全部満席の状態、昨年度には及ばず、結果としては 1 割減となりました。

次に、キッズプラネタリウムは「ペガロク 火星に大接近！」を作りました。キッズプラネタリウムの平成 30 年度の年間の観覧者数が 2 万 9,259 人、平成 29 年度は全体で 2 万 5,799 人なので、2 割増になりました。観覧者の低年齢化が進んでいると考えています。そのほか、プラネタリウム特別投影「星空とともに」（東日本大震災の被災者から寄せられた星と震災にまつわるエピソードをもとに仙台市天文台が制作）「おもいやりプラネタリウム」（障がいのある方や乳幼児をお連れの方、そのご家族の方が心置きなくご覧いただける投影）をほぼ月 1 回実施しています。（大型映像、学習投影について説明）

天文クラブには 40 人を超える人数が参加しました。望遠鏡の作成や、天体望遠鏡の操作方法を学び、天体観望会を実施しました。また、ほぼ月に 1 回天体観望会を実施し、昨年度は 15 回開催しました。698 人の参加があり、毎回 10 倍近い応募があります。

事業報告書 24 ページ 1-4、参加体験型学習活動

① 参加体験型プログラム

いつでも気軽に体験できる実験・観察・工作ということで、各展示室のラボ参加者は年間 6 万人です。しくみラボでは、主に工作や実験、しぜんラボでは、植物や動物を観察する機会、ちきゅうラボでは、鉱物や地球科学をテーマに自由に見たりさわったりできるような内容で展開しています。

じっくり取り組む教室としては、科学学習室を使って、時間をかけていろいろなテーマで実施しています。（マッピング、プランクトンの観察について説明）

サイエンスショーは、ゴールデンウィークやお盆の期間、大勢の来館者が来るときに、大勢が同時に参加できるということで実施しています。今年度は約 2,400 人が参加しています（振り子のショー、科学芸のショー内容について説明）

昨年試行し開催した大人向けの平日講座についてですが、今年度は地球科学のほかに、現代天文学、鉱物を取り上げたフィールドワーク、プログラミング、ハーブをつくるなど内容を拡大して実施しました。

② 講演会・サイエンスカフェ

主に中高生から大人を対象として、大学、研究機関、民間企業等から研究者を招いて、最先端の科学技術をわかりやすく解説するという内容で、今年度は約 1,100 人が参加しました。仁科記念講演会、宇宙科学振興奨励賞の講演会、国立天文台台長講演会について説明）

事業報告書 38 ページ 1-7、研究機関、科学・教育関連団体との連携活動

サイエンスカフェについて説明（全英語のサイエンスカフェ、東京大学宇宙線研究所の研究者の宇宙に関する講演、数学に関するサイエンスカフェ、高エネルギー加速器研究機構による子ども向けのサイエンスカフェ）

その他の講演では、アートと科学のテーマで情報通信研究機構と連携して実施した「電磁波で観たフラアンジェリコの壁画」、防災科学技術研究所より講師を招いて実施した「郷土史と科学から見る地域の防災」、F C 東京との連携によるプラネタリウムトークショー、大型映像講演会について説明。

事業報告書 36 ページ 1-6、人材育成・研修活動

②キャリア教育

平成 30 年度は 8 校受け入れ、展示室での説明、水槽のメンテナンス、アンケートの集計等というような職場体験を実施しています。

①教員研修

東京都教職員研修センター、学芸大学と共同して実施する形で、顕微鏡の見方、直流の電気、土壌生物などのテーマで教員の方たち向けの研修を実施しています。

事業報告書 33 ページ 教員向けプログラミング体験について説明

平成 29 年度末にプログラミング用の機材を購入、館内ワークショップでは子ども向けにプログラミングを実施、ジュニアボランティアも活躍しています。

また、学習投影観覧者にプログラミング学習を実施（マインドストームを使用。）教員向けですが、教員向けの研修を午前中に実施し、午後にロクトメンバーズの方にモニターとして生徒になってもらい、先生が今度は子どもたちに教えるというような形で実施しました。

事業報告書 35 ページ プログラミング学習支援について説明

教員向けプログラミング体験が現在のプログラミング学習支援に発展しています。これらを通じて教育の現場がプログラミングの授業について当館に期待を寄せていると感じています。

指：事業評価報告書 3 ページについて補足説明

教員向けプログラミング体験等の導入の経緯説明。プログラミングを今後どのように進めていくのか理科部会等で共通の課題を持つ機会を得ることができたこと、また長年聖望学園ではプログラミング研修、研究を手がけていて、その先生方にまずは先生向けのプログラミング教室というのを体験していただく。圏域の小学校の先生がプログラミングに慣れて、その地域、地域の小学校などに戻り、そこがハブとなってプログラミングを面となって広げていくような形ができたかと思っていました。実際に教員向けのプログラミング体験に参加した先生が中心となり、館はサポート側に回るだけで、先生方が主体になってプログラミング教室を広げていく動きとして発展しましたし、近隣の小学校でも中心となる先生が出向いて、先生方と一緒にプログラミングを進めることにつながったことに深い意味が

あると思います。

今後は多摩六都科学館ガイドにもプログラミング体験等を追加していますので、ニーズが出てくると思います。館側のスタッフ不足については、多くのボランティアさんがプログラミングを学び、サポートしてくださるといったところまで話が発展していますので、今後プログラミングは当館の主要な事業になっていくと思います。

指：企画展について補足

川についても鉄道についても集客の面では芳しくなく、参加者が少ない傾向がありますが、スタッフが川に出向き、その川で環境保全をされている市民団体の方と交流をしながら、実際に何が行われているかというようなことを研究、学んで、整理するというような活動（調査研究）を継続していくことが前半の部分の科学館事業のベースになったと思います。結果として、今後の常設展示の中にフィードバックされ、地域を考える、地域の自然を考えることにつながっているのかなと思います。集客をとるのか、地域のことについての研究調査に軸足を置いてやるのかは、バランスをとりながら実施する必要があると考えています。

事業評価報告書 3 ページ ①科学館事業 ⇒自己評価 「A+」良好

事業報告書 43 ページ 2、地域拠点事業

指：地域の企業との交流事業について説明。

「農と食の体験塾「大豆編」実行委員会について説明。種植えから始まって、草刈りに行って、まずは枝豆状態で収穫して、枝豆の試食をする。講義を受け、脱穀をして、選粒という作業があります。これは5年目になっている事業です。参加者の間の地域コミュニティーの中で実施される方向に進んできていて、いい意味で科学館の手から離れていっているなど感じています。

指：農と食の体験塾「大豆編」を研究として発表した事例を紹介。（東大生態調和農学機構より提案）ペーパーをつくり、ポスターセッションを実施しました。教授、研究者、学生、体験で来ている小学生などの発表がありました。（約50団体の参加※個人参加も含む。）

初めは、ただ大豆をつくって楽しむ雰囲気でしたが、大豆についてどのような考え方を持って栽培するのか、あるいは大豆の作物としての戦略的な意味とか、もう1つは、東京在来の品種をまいて、それを保全、継承していくというような研究も含めて発表しました。その意味で、当初より自主的な運営に変わってきていて、昨年度は25回開かれ、草刈りなどの体験をとおして、農業の今抱えている意味などを十分体験し、冊子もつくり、随分成果が上がったのかなと思います。

事業報告書 48～52 ページ 2-1-2、ボランティア会との協働

指：ボランティアとの連携活動について説明。お正月に実施した昔あそび広場、市民感謝デーのときに実施しているわ〜くわく科学広場、「からだの部屋」での活動、ジュニアボランティアも様々な教室でサポートしてもらっています。ボランティア活動が活発に行われ、科学館活動を支えていることを見ていただけたと思います。（たまるく☆サイエンスラボの活動に

ついて説明) また、学芸大学で開催される青少年のための科学の祭典にアウトリーチ活動を行っていただいています。(S L 模型運転士会等の紹介) ボランティア総会では活動発表会がありますし、科学館の消防訓練にも参加していただいています。昨年度の研修では、神奈川県立生命の星・地球博物館に行きました。このような形で連携させていただいています。

事業報告書 52 ページ 2-2、地域資源創造・魅力発信活動

自然観察会について説明

企画展に関しては、企画展での魅力発信ということで、圏域の川や、鉄道などをテーマに、様々な形で多くの方たちに地域の魅力を発信しています。以上が地域拠点事業ということになります。

指：ボランティア会との協働について補足

事業評価報告書 5 ページ ボランティア活動について

ボランティア会メンバー(シニア 110 名、ジュニア 40 名)年間約 5,000 人が活動している状況にあります。スタッフは 10,000 人が業務についているという中で約 1 対 2 の割合で 3 分の 1 以上を支えているという計算になります。私たちのサポートは通常かと思いますが、リーダーの改選が上手くいっていないということが課題としてあります。活動は非常に活発だけれども、リーダーになって引っ張っていく方がなかなかいない。曜日班のアイデアとして月替わりでリーダーをやったらどうかというようなことが出て、少しずつ前進の姿が見えていると思います。

地域拠点事業について言えば、スタッフが地域のことを頭の中にイメージできる、地図が描けるというようなことが重要なと思っています。運営協議会のメンバーに圏域の農家の方に入っていただいて、圏域の農業のやり方、あり方を実際に学ぶということが地域づくりに具体的に近づいている、傾向としてお伝えできるのではないかと思います。企画展ではスタッフにも利用者の方にも具体的に地名を覚える、自然の形を覚えるというようなことから地域づくりのベースを拡げ、しっかり作っていきたいと思い実施しました。

事業評価報告書 5 ページ ②地域拠点事業-1 ⇒自己評価 「A」適正

事業評価報告書 7 ページ ③地域拠点事業-2 ⇒自己評価 「A」適正

事業報告書 54 ページ 3、マーケティング

指：平成 30 年度は創立 25 周年ということで、市民感謝ウィークを実施しました。(各市の実施状況を説明。)

これは平成 30 年度で継続するということになっていますので、今年度も東村山ウィークということで実施しております。来月は東久留米ウィークを予定しています。ハブの形成ということで実施しています。

指：地元農家との連携について説明。

マーケティングについては、来館者調査ということで直接声かけによるアンケートと、入館時にどういう人たちがどれだけ来ているかを調査しています。来館者情報は 7 年間ずっととれています。広報活動について説明。(ロクトニュース：年間 5 回、104 万 4,000 部発行し

ています。チラシも19種類作成していきまして、全部で11万2,000部発行しています。その結果、今までやってきた結果として、昨年度が24万4,436人をお迎えしました。

委：1ついいですか。各学校のプログラムに対する評価というのはまとめられていますか。

指：2ページ目の参加体験型学習プログラム満足度の下に学校団体という赤字になっている箇所がありますが、学習プログラムに来てくれた学校の先生にアンケートをお願いしてその満足度として今のところ93%の学校より学習効果が高いと答えていただいていますし、展示見学による学習効果については、97%が高いというふうに答えています。

指：全校利用となるには、学習投影などの無料化とかというのも検討しなきゃならないかもしれません。

委：やはりいろいろな地域も含めて重点項目を決めていくというのはとても大事だと思うのですが、この科学館のベースって地域の学校にどうしっかり根をおろすかというのがあって、それで初めて地域事業に手を出していくということが広がっていくと思うんですね。そういう意味では、どうしても全校来ていただきたいなという感じがあるので、やっと29年度に全校来てもらえたなと思ったら、1校消えたのがちょっと寂しかったので、質問しました。

ソーシャル・インクルージョンの取り組みについて

指：多摩六都科学館では、ソーシャル・インクルージョンの取り組みとしましては、まず先行していたのは天文の関係で、プラネタリウムで「おもいやりプラネタリウム」というものを、毎月開催しています。それ以外の対象を広げていくものとして、昨年度から明治薬科大学（清瀬市）と一緒にお年寄りの方向けのアウトリーチプログラムというのを展開しています。そちらはKAPLA（カプラ）を使ったもので、カプラを使ったことで手先を活性化し、お年寄りの方の健康に寄与するということができるかどうかを明治薬科大学の先生と共にエビデンスがとれるかどうか研究事業として進めています。これは今年度も進めていて、今年度は西東京市の社会福祉協議会の方と一緒にやろうということを進めています。

文化庁の助成事業というのは、在住外国人の方を対象としたプログラムを実施しようということで、最初に難しいのは、プログラムをやるということよりも来てもらうという情報を届ける広報活動が難しいので、そちらをやっていくということと、非言語化の推進、あとはスタッフのやさしい日本語といまして、「ご清聴」と言ったら多分外国の方はわからないので、「お話を聞いてくれてありがとう」ということを言うと伝わるけれども、どういうふうに言ったらいいかというのを館内全体で学んでいこうという研修の機会を助成金の中でやっていきたいというふうに考えています。

こちらのプログラムは単年でできるものではありませんので、現在のところ5カ年で申請しています。これができる地域の中で各市の在住の外国人の方が科学館にかかわることができるようなきっかけをつくって、その中で新たなコミュニティが生まれ、母語を生かしたボランティア活動ができるようになって自尊心が高まるとか、科学に興味を持って子どもたちの将来につながっていくような、そのような場に科学館がなっていったらいいなという

ことを目標に活動していきたいと思っています。以上です。

委：市民ウィークで入場料の減免などを行っていますけど、チラシを持ってきた人を減免するのですか。どういうふうにして減免としているのですか。

指：いや、免許証でもいいですし、子どもたちは学校名を言ってもらったりすることで対応しています。

事業評価報告書 9 ページ ④マーケティング ⇒自己評価 「A」適正

事業評価報告書 11 ページ ⑤財政計画・体制整備 ⇒自己評価 「A」適正

長：今度は科学館組合の説明ですね。お願いします。

組合より自己評価の報告

組： 多摩六都科学館組合の自己評価につきましては、業績指標の主なものの実施状況を中心にご説明させていただきます。初めに、①の事業計画に関する自己評価ですが、事業評価報告書の12ページをごらんください。項目2の中期の重点戦略並びに業績指標の表中、業績指標欄のうち、ソーシャル・インクルージョンに基づく活動への取り組み、圏域内でのアウトリーチ活動の推進について、評価結果欄をごらんいただきますと、実施状況としてはまだまだ十分とは言えませんが、一定の水準には達することができたものと考えています。

個別具体的にご説明しますと、ソーシャル・インクルージョンに基づく活動への取り組みにつきましては、先ほどからもお話が出ておりますとおり、平成29年度までの圏域市民感謝デーに加えまして、構成市ごとの市民感謝ウィークを実施し、圏域市民の全ての人々が利用しやすい科学館づくりとして利用料金の減免措置や圏域市主要駅からの無料シャトルバスの運行などを行い、取り組んでいる状況です。

続きまして、圏域内でのアウトリーチ活動の推進につきましては、実施主体は指定管理者となりますが、科学館組合が構成市の窓口としての相談を受け、間接的ながら特に来館しづらい地理的条件下にある団体や市民に対する実施を前向きに進めているところです。

恐れ入りますが、13ページをごらんください。項目2の表中の業績指標欄のうち、ボランティア活動の成果を発信、圏域市民を対象とした地域づくりに関するプログラムの実施、長期的な観点を持って取り組みにつきましては、評価結果欄をごらんいただきますと、実施状況としてはまだまだ十分とは言えませんが、一定の水準には達することができたものと考えています。

ボランティア活動の成果の発信では、圏域外の行政関係者の視察などで対外的にボランティア活動を紹介しています。

続きまして、圏域市民を対象とした地域づくりに関するプログラムの実施につきましては、圏域構成市ごとの市民感謝ウィークを5月から1月までの奇数月に実施しました。実施主体は指定管理者となりますが、組合が構成市や商工会の窓口としての役割を持ち、間接的ながら地域づくりプログラムの実施にかかわっています。

以上、これらに基づく定性評価ですが、14 ページの自己評価欄で地域資源の価値発信機能の強化、圏域市民をつなぐハブとしての取り組みや課題を整理しまして、評価をAとさせていただきます。

事業評価報告書 14 ページ ①事業計画 ⇒自己評価 「A」適正

続きまして、②経営計画に関する自己評価です。恐れ入りますが、15 ページをごらんください。項目2の表中、業績指標欄のうち、市民モニター制度の実施、科学館の取り組み周知活動の実施、交通の便を改善し利用しやすい科学館への取り組み、誰もが利用しやすい事業の実施、地域拠点事業取り組み状況のモニタリング並びに検証、ネーミングライツの検討、圏域5市が共同で実施する助成事業の継続実施、人的ネットワーク充実に向けた取り組み、財政計画の検証・改訂、施設の長寿命化計画の検証並びに作成について、評価結果欄をごらんいただきますと、実施状況は、施設の長寿命化計画の検証並びに作成を除いて、こちらも一定の水準は達することができたものと考えています。なお、施設の長寿命化計画の検証並びに作成につきましては令和3年度ごろに実施を延期することとしましたので、こちらでは検討としています。

市民モニター制度の実施については、恐れ入りますが、21 ページをごらんください。こちらの市民モニター名簿に記載されているとおり、平成30年度は2名の市民が新たにモニターとして加わり、10名体制で12月と3月の2回、意見交換会を開催しました。意見交換会では、市民モニター、指定管理者、設置者である科学館組合の三者が課題や改善策をその場で協議することによって、迅速な業務改善への契機となっています。

ネーミングライツの検討については、平成29年度に依頼していたことが進展し、民間事業者1社と面談を行うまでに至りました。

財政計画の検証・改訂については、平成31年度から平成35年度までの新たな計画期間の計画を策定し、施設の老朽化に係る大型空調設備の更新に対応する内容となっています。

施設の長寿命化計画の検証並びに作成についてですが、施設の老朽化に係る当面の課題は、大型空調設備の更新です。これに係る財源については構成市負担金の増額という形でご理解をいただくことができたため、平成30年度の実施は見送りまして、改めて令和3年度ごろに実施を延期することとしました。

構成市の負担金の増額につきましては、平成31年度多摩六都科学館組合構成市負担金(案)ということになっておりますが、これは決定ということになります。こちらの表のとおり、一番右側の欄に平成30年度負担金との比較という欄があります。そのうちの一番左の欄のところに、平成30年度負担金額ということで各構成市の負担金額がご案内されております。構成市の負担金額は、30年度までは、合計金額の欄ですが、3億8,200万円ということでありました。平成31年度からは、その隣の欄になります負担金の合計というB欄になりますが、こちらの欄のとおり4億1,300万円ですので、平成30年度の比較としましては3,100万円の増という形で各構成市の皆様方にご了解をいただけたという状況でございます。

以上、これらに基づく定性評価ですが、16 ページの自己評価欄で、市民モニター制度やネーミングライツなどの自主財源の確保、財政計画などの取り組みや課題を整理しまして、こちらもAとさせていただきます。

以上、概略ではございますが、多摩六都科学館組合の自己評価の説明を終わります。

長：ありがとうございました。この財源が増えたというのは、大型空調設備の更新ということがあって増えて、また来年はもとに戻る予定ですか。

組：平成 35 年度までは、今ご紹介させていただきました 4 億 1,300 万円での負担金額ということでご了解をいただきました。

長：そうですか。何かご質問ございますか。では市民モニターの自己評価の説明をお願いします。

プランニング・ラボ村井氏より市民モニターの定性評価について説明（資料 2）

プ：資料は 2 種類あります。総評の A 3 横判と A 3 縦判の詳しい内容が書かれたものになります。細かい内容についてはのちほどご覧いただけたらと思います。

資料 2 の総評の資料でご説明します。平成 29 年度まで 8 名だったのが昨年度の平成 30 年度は 2 名増えまして、10 名で定性評価をしていただいています。東村山市の市民の方がいなかったのですが、今回お一人入っていただき 5 市の住民の方がそろったという状況になっています。

1 枚目は、上が使命にかかわる指標になっていまして、下が事業目的別の指標の総評です。事業目的別を見ていただけますでしょうか。全部で 8 つの指標について市民モニターの方に定性評価をしていただきました。評価は全体にアップはしています。1 つだけ、多摩地域の価値を見出せる事業の実施という 6 番目の指標が少し下がっています。それほど大きな違いはなくて、少しマンネリ化が出てきているのではないかという意見がありましたが、高評価はいただいております。

次に昨年度ご説明したと思いますが、下から 2 番目の人的ネットワーク充実に向けた取り組みについては、当面は組合と指定管理者の指標として自己評価を行い、具体的に成果が示せるようになった段階で市民モニターから定性評価を受けることにしています。それからもう 1 つ、4 番目の指標としてありましたコミュニティ・カフェの導入によって、新たな地域コミュニティの交流、社会参画の場として機能しているかについては、単年度では成果が評価しづらいということで、中期的な 3 年後に行います——3 年後というのは来年度になりますけれども、中期の指標に変更しています。こちらの事業評価報告書の中でそれぞれの業績指標一覧のところ、黄色で色がついているところが市民モニターにかかわる指標になっています。

もう 1 つ、市民モニターの方にはオプションということで、全員の方ではないですが、使命と事業目的という外部評価の皆さんと同じ観点から評価をしていただいています。これが、総評一覧の 2 ページ目です。これも概ね評価結果はとても高い結果になっておりまして、昨年度よりも全体的にアップしている傾向であるといえます。

細かい内容については見ていただくとわかるのですが、人によって段階評価が異なるところがあります。それは、比較的近いところに科学館がある、要するにジュニアボランティアとして子どもが科学館事業に参加しているような方の場合は、科学館を大変身近に感じ、評価が高くなっているという傾向があり、他の方と少し差がついてしまっているところがあります。あと、市民運動をなさっている方たちから見ますと、科学館が地域拠点事業とか地域にかかわる活動をするというのは少々おこがましいのではないかというようなご意見もあり、それでも、そうした取り組みに対しては時間がかかっても取り組んでいくというその姿勢については評価をいただいています。ただ、きちんと資料、データの収集をした上で進めたほうが良いというようなご意見もいただいています。

簡単ですが、このような形で市民モニターの定性評価を進めています。きょうはオブザーバーとして市民モニターの方がお一人来ていただいていることをご報告します。以上です。

長：何かご質問、ご意見ございますでしょうか。

委：1つだけあります。市民モニターって公募ですか。

プ：公募と、あと他薦という形で関係者の方の中から、この方がいいのではないですかということで選んでいただいて、面接というか、お話を聞いた上でお願いするという形をとっております。

委：(資料2より) これは10人だけど、14という数字は。

プ：中期3年目である平成28年度のときに一旦やめられて、そして新しく入った方がいらっしゃいます。ただし、継続の指標に関してはこれまでの結果も示すということで、それでこれまで参加してくださった方の延べ人数が14名で、途中で抜けた方がいるので、その方たちのところはグレーの色がついているという形になっています。

委：わかりました。

長：それではここで説明は終わりにして、5分の休憩とします。

(休憩)

(2) 平成 30 年度外部評価について (資料 1 事業評価報告書)

各委員で協議の結果、平成 30 年度の外部評価は以下のとおりとなった。

(評価の対象：指定管理者)

3 ページ	①科学館事業	平成 30 年度評定	「A+」	良好
5 ページ	②地域拠点事業－1	平成 30 年度評定	「A」	適正
7 ページ	③地域拠点事業－2	平成 30 年度評定	「A+」	良好
9 ページ	④マーケティング	平成 30 年度評定	「A」	適正
11 ページ	⑤財政計画・体制整備	平成 30 年度評定	「A」	適正

(評価の対象：多摩六都科学館組合)

14 ページ	①事業計画	平成 30 年度評定	「A」	適正
16 ページ	②経営計画	平成 30 年度評定	「A」	適正

(評価の対象：指定管理者及び多摩六都科学館組合)

18 ページ	3、総評 使命ならびに活動理念	平成 30 年度評定	「A+」	良好
--------	-----------------	------------	------	----